

平成二十三年度「花のまわりみち」

俳句入選句

木村 里風子 選

特選

(三句)

「特選一席」

人みんな花籠の中造幣局

下 末 かよ子

(評) 珍しい把握である。平素は入れない造幣局を花籠としたのである。桜とは言っていないが、充分に雰囲気を出している。

「特選二席」

雲一つなき青空や花吹雪

亀 井 朝 子

(評) 明るい日の下で散る桜のひとひら毎が光っているのが見える句。無駄のない表現である。

「特選三席」

硬貨打つ音のかすかや花の下

吉岡 昌文(雅文)

(評) 入選句の中にも職場と桜を句材にした作品がある。どちらも働く人と花との対照。どちらも外されない作品。読者は読み比べて鑑賞して欲しい。音のかすかは花に対しての思いやりの措辞になるのである。

入 選

(五句)

リハビリを済ませてくぐる花の門

河村 幸子

(評) どうしても見たいという気持の弾んでいるのが伝わるのはリハビリを済ませてにある。それだけに美しい花である。

花のみち光る雫の桃色に

山口宏子(ひろ女)

(評) 雨後の花の様子を桃色の雫としたのが花の咲き満ちていることを現わしている。

靴の紐むすび直して花のみち

中 植 勝 己

(評) 花を愛でる心得ととも見えるのが靴の紐を結び直すにある。さあ、しっかり勸賞しよう。

銭造る音のひびくや花の下

五 石 満智子

(評) 人は花を見て廻っているが職場は休みではない。黙々と仕事をしているのである。銭を造る音と花の対照。

素つ気なき別れの言葉花疲れ

石 橋 康 徳

(評) さよならが素っ気ないとは、美事な花と人の多さか。かなりの疲れのようである。

佳作

(十八句)

かぜにのりはなびらとどけみちのくへ

たつぷりと花を散らして日暮かな

雨音と共にちりたる桜かな

咲き進む花の重さに枝垂れけり

花の径雨のち晴の影やさし

園内を風の早さに落花かな

車椅子押す少年に桜散る

満開の楊貴妃桜犬と見る

陽の高さ月の高さへ花吹雪

昼下り米寿の母と花の道

一吹き風の風に弾める花手毬

八重桜ぼんぼりの灯と競ひをり

たをやかに咲き満つ八重の桜かな

咲き満ちてこぼるる程の桜かな

落花濃し雨に濡れたる土手に貼り

満開の花の下にて深呼吸

花の道見知らぬ人と語り合い

青空に琴の音抜けし花の道

根本康子(りんどう)

打越 ゆかり

花田 静(しろ)

山岡 祥子

若宮 直美

藤井 智恵子

志田 寿江

武田 久美子

神波 瑞江

安井 恵子

勝田 清子

土村 俊子

正山 史明

中植 紀子

斎藤 金二

谷口 敬誠

山口 多美子

榭原 みな子

選者吟

人去りてくらがりに散るさくらかな

木村 里風子